平成17年8月10日（水曜日）　シルバー産業新聞

（13）　第106号　（平成9年11月5日第3種郵便物認可）

日本福祉大学客員教授
後藤芳一

連載―67

行幸中継
和の伝統を機械に

「いま、（千葉県警に）引きつぎました」
「4分の遅れ」
「松戸警察のところです」
「遅れは3分」
「消防署を過ぎました」
上空に、ヘリの音が近づく―。
7月半ばの午後、黒い車列が、まちはずれの工場にはいってきた。
前衛車につづく車には、菊のご紋のナンバープレート。お召し車である。
千葉県松戸市の、ハリマ産業株式会社に、天皇陛下の行幸があった。
当社は、昭和45年、現社長の大久保敏行氏（66）が創業した。社長は姫路の出身、それで、ハリマである。
ふすまなどの建具をつくる会社で、社員は48人。その半分は、パートの職員である。
伝統を受けつぐふすまは、職人が、経験と勘でつくってきた。
しかし、職人が減る一方で、高層マンションなどは、一時に、質の揃う製品が多く要る。
大久保社長は、職人とおなじ質で、速く、安くつくることをめざした。それには、工程を工夫して、機械に置きかえる必要があった。
でき合いの機械はないので、機械や装置は、自分で考えた。当社にある機械の9割が、社長のオリジナルである。
もともと社長は、ものづくりが好きだった。
理工系をめざしたものの、商学部にすすみ、金融機関（信用金庫）に勤めた。
10年ほどで独立し、当社を興した。当時、開発されていた、近代工法のふすま（ダンボールふすま）を作りはじめた。
その後、本物を求めて、天然素材と伝統技術を考えるようになった。
ただ、「職人の作業を機械にかえるには、自動化すれば済む、というわけではない。
ふすまの構造と作る手順には、巧みなしかけがある。
たとえば、ふすまの強さは、紙でもっている。
ふすまは、芯材に下地紙と上紙をはり、4周に縁（ふち）をつける。
芯材は細い木であり、軽いが柔らかい。そこに下地紙をはる。
下地紙は、はる前に湿らせる。そうすると、ふすまの横幅90センチが、2センチほど伸びる。しばらく伸びたままで、乾くにつれてもとの長さにもどる。
下地紙は、伸びているときにはる。乾いたあと、ふすまの中で紙が縮もうとする力がはたらいている。ふすまが、ぴんとしているのは、その強さによる。
職人が作るときは、下地紙をはるまでに、糊をとく作業をする。そのあいだに紙が伸びて、はるのによい長さになる。
職人の手順には、こうした経験がしくみとしてはいっている。
単に自動化するだけでは、速くはなっても、「でき上がりが、何かおかしい」ということになる。
職人のワザを機械化するのは、〝かくれたノウハウ〟をみつけ、それを置きかえる作業でもある。
当社の工程と機械は、こうした、〝伝統と経験〟をカタチにしたものである。
「30年やって、ようやく、ちゃんと作れるようになりました」と、大久保社長はいう。
そうした苦心に、陛下は耳をかたむけ、ねぎらいと励ましの言葉をくださった。
陛下が、もっとも長い時間をさいて、ご覧になったところがある。
障子紙をはる作業である。担当するA君には、障害がある。
同社では、大久保社長以下、A君を大切に育ててきた。糊をつけやすいように、A君が使う専用のローラを作った。
A君は、それを使いながら、きれいに仕上げていく。
陛下は、間近に寄ってA君の手元を見つめ、話しかけられた。
夢のなかを過ぎた80分。
つゆ明けに近い一日、前後でこの日だけ、青空だった。
7月15日（金）15時33分ハリマ産業御着、16時54分御発。随行は中川昭一経済産業大臣、望月晴文中小企業庁長官、高橋武秀関東経済産業局長、堂本暁子千葉県知事と川井敏久松戸市長。お出迎えは、大久保社長、大久保節子取締役、大久保謙一常務取締役、大久保重人取締役、川井淑之同ほか。関係機関は宮内庁、皇宮警察本部、関東管区警察局、経済産業省中小企業庁、同関東経済産業局、千葉県、同県警、松戸市、同市消防署ほか。御着が3分遅れたのは、沿道の日の丸のお迎えなどに徐行したため。